令和６年度　学校評価（報告書）

	重点目標に対する具体的取り組み	主担当	評価	評価の観点 達成度判断基準	分析（成果と課題）
重点目標１　「学びに向かう力（主体的に自分の頭で考える）」を育成する。					
①	現代社会を生き抜くためには、あらゆる場面において「主体的に自分の頭で考える」ことが大切である。その目標達成に向け、丁寧に時間をかけて取り組む必要がある。学校の教育活動全般で、常に「自分の頭で考える」ことを生徒に求めるだけでなく教職員が率先し実践していくことも含み方針を掲げた。指示待ちの受け身の姿勢から抜け出し、さまざまな場面で自身の最適解を見出すまで、思考の過程や行動力を養うことに主眼をおき、生徒の活動を支援していく。	部署 学年会 教科会	B	Ａ：できた Ｂ：概ねできた Ｃ：やや不十分だった Ｄ：不十分だった	令和６年度は生徒のさまざまな活躍が多く見られた１年であり、これまで本校が取り組んできた「主体的に自分の頭で考える」という教育活動が、ようやく実を結び始めたような手応えを感じる１年であったとも言える。 一方、学校業務に係るすべての見直しをテーマに掲げ、これまでの本校の教育に関わるすべての活動一つひとつを再度、見つめ返すスタートの年でもあり、まだまだ課題も多いと実感した１年でもあった。
②	授業担当者は、生徒の実態を踏まえた授業の在り方や教授法について教科内研究授業や研修などで研究し、日頃から改善を図るよう心掛けなければならない。生徒が「主体的に自分の頭で考える」ことが教育活動の至る所で用意されていなければならず、授業はまさにその最たるものであることを認識し、教科内でのＰＤＣＡの実践により、教科全体の指導力の向上に繋げていく。	教科会	B	Ａ：できた Ｂ：概ねできた Ｃ：やや不十分だった Ｄ：不十分だった	教科内研究授業では、各教科で授業の振り返りに重点をおくなど、授業の質のさらなる向上をテーマに掲げ取り組んだ。また、限られた授業時間を有効利用するために授業の始業時間を厳守し、生徒にとって納得感の得られる授業の提供を学校全体で心掛けた。さらに、自習時間を作らないよう振替授業を実施したため９割以上の授業時数を確保できた。
③	自己の在り方や生き方をテーマに、生徒は入学時から文理選択や進路研究に関するテーマについて取り組んでいる。この一連の取り組みを生徒自身が「キャリア学習」の集大成として自らの進路目標の実現に向け、どのような取り組みが求められているかを考える機会としていく。また、自身の人生設計を考える良い機会でもあるため、定期的な面談と振り返りシートを活用しながら、客観的に自分を見つめるきっかけとする。	探究担当 学年会	B	Ａ：できた Ｂ：概ねできた Ｃ：やや不十分だった Ｄ：不十分だった	大学講師の協力もいただきながら、２年次の探究発表までの流れが本校において定着してきたところである。この探究活動を通し、自身の生き方、進路選択を考え、３年次には進路実現へと結びつけていくのだが、今年度は進路目標達成に向け、最後まで粘り強く学習に励む生徒の姿も多く見られた点を評価したい。
④	担任による計画的な面談と面談記録の保管については、これまで同様の取り組みを継続していく。また、面談を通じて知り得た情報は必ず学年主任や関係機関に報告・連絡・相談を行い、情報の共有を図ることを徹底していく。さらに、管理職以外にも必要に応じて専門家に相談し、教員１名で対応するのではなく、チーム・組織で取り組むことを心掛ける。	学年会 担任	A	Ａ：できた Ｂ：概ねできた Ｃ：やや不十分だった Ｄ：不十分だった	教師と生徒が信頼関係を築くうえで、基本となるのは面談である。面談で得た情報を教師一人が抱え込むのではなく、いかにしてチームで共有できるかも重要である。一つひとつの事案に丁寧に対応することが求められる中で、令和６年度はチーム・組織として共有できたと分析する。
⑤	学習習慣の確立は、自身の進路目標を積極的に考えるきっかけとなるため、学校全体で全面的に支援していく。具体的な方策として、Classi やスタディサプリ ENGLISH などの動画視聴に取り組む環境を提供するほか、放課後には教職を目指す大学生による「実践型教育体験」や、東大生特別講座などを昨年度に引き続いて実施し、生徒の学習意欲と学力向上に向け組織的に対応する。	進路支援部 学年会	C	Ａ：できた Ｂ：概ねできた Ｃ：やや不十分だった Ｄ：不十分だった	個別最適化を目指して導入している動画ツールの充実や「実践型教育体験」や「土曜講座」の展開に見られる多様な学習環境の整備により、生徒の学習意欲は向上していると思われる。また、面談の機会のみならず、日頃からの声掛けと観察によって生徒の変化に気付くとともに、その時々に応じた支援を行うことが課題でもある。
⑥	英語はこれまで以上に必要な教科として捉え、習得に向けた取り組みを強化していく。英検受検を教科だけでなく、学校全体で組織的に薦めていく。昨年度一部のクラスで実施していたスタディサプリ ENGLISH を今年度は１年生および２年生のすべての生徒に取り組ませ、朝学習において実施している。	英語科 学年会	B	Ａ：できた Ｂ：概ねできた Ｃ：やや不十分だった Ｄ：不十分だった	英検準２級以上の合格者が在籍生徒の３０％を超えるなど、英検に対する受検意識は教員および生徒の間に確実に浸透してきたようである。また、英検準１級合格者が複数名出た点も令和６年度の特徴であった。 一方、今後の大学受験も視野に入れると現状の合格者をさらに増やすことが本校としての明確な目標の１つであり、今後は英語科を中心としながら英検への受検者ならびに合格者の増加を目指していく。
重点目標２　Ｓコースおよび特進コースの学力強化を目指し、組織的に取り組み、結果を出す。					
①	昨年度より開講していた「東大生特別講座」を今年度も設定した。また、土曜講座として「学習会」を継続して実施する以外にも、希望者を対象に「勉強合宿」や「大学訪問」も予定している。これらの企画を通して、学習意欲の向上に繋げるほか、クラスとしての一体感、仲間同士の繋がりを体感し、学習に対して前向きな気持ちで臨むことができるよう支援体制を整えている。	進路支援部 学年会 教科会	A	Ａ：できた Ｂ：概ねできた Ｃ：やや不十分だった Ｄ：不十分だった	Ｓコース在籍生徒対象の「東大生特別講座」も３年目を迎え、初めての受験機会を得た。東大受験者以外にも、旧帝大をはじめとする難関大学に４名の生徒が現役合格を果たすなど顕著な実績を残した。 また、特進コースから金沢大学への合格者も多く出るなど、Ｓコースおよび特進コースが残した功績は大いに評価できる。 さらには、進学コースからも国公立大学に１４名が合格するなど生徒たちの努力が大きく実を結んだ。
重点目標３　スクール・ミッションおよびスクール・ポリシーの作成を契機として、本校のあり方を振り返る。					
①	本校の教育活動を一から点検し、これまでの活動方針を再確認する良い機会と捉える。そのために新たなメンバーでチームを編成し、昨年度の取り組みを受けて、定期的に点検していく。部長・学年主任を中心に部署や学年会で共有し、全員が共通認識を持てるよう進めていく。	部署 学年会	B	Ａ：できた Ｂ：概ねできた Ｃ：やや不十分だった Ｄ：不十分だった	本校の教育活動および教育方針を職員全体で考える機会でもあり、令和６年度は検討項目の柱となるものの洗い出しを行った。今後は、その柱を中心として細部にわたる領域まで検討の範囲を広げ、丁寧に時間をかけて見直し作業を進めていく方針である。